



第30回という記念すべき東書教育賞で表彰を受けられる先生方、おめでとうございます。学年末や卒業式なども近く、何かとお忙しいとは存じますが、そのさなかに受賞という栄誉を手になされたこと、ひとしおめでたく存じます。

ところで、応募されました皆さん方のご努力もさることながら、その後今日まで、実に多くの方々の協力がございました。論文を募集された東京書籍株式会社の皆さん、応募された全編の論文の中から審査可能な編数にまで絞り込んでくださった東京教育研究所や教科書編集委員の先生方、これらすべてのエネルギーと見識に、深く敬意を払いたいと存じます。

先ほど社長がふれられたように、この賞の募集が始まってから実に30年間の歳月が流れたこととなります。この間、応募される先生方の数は増え続けてきました。教育実践を絶えず文章にきざみ、応募されてきた全国各地の先生方にも感謝いたしたいと思います。

さて受賞された皆さんの論文について、要旨を紹介し審査委員会の概評を簡単にご紹介したいと思います。

#### 《小学校》

○最優秀賞：鹿児島県鹿児島市立南小学校  
牧逸馬先生〈理科好きを育てる授業づくりと環境づくり〉

子どもの「理科離れ」が叫ばれて久しくなりますが、理科離れとは自然そのもの、そして理科という教科に対する子どもの興味・関心・学力が低下していること、若者の進路選択時の理工系離れ、それに大学・短大の理工系学生の学力低下、そしてその結果、次世代の研究者・技術者が育たないこと、など広汎で深刻な問題を総称した言葉です。牧先生の実践は、理科好きな子どもたちを育てるために授業づくりや環境づくりの工夫に取り組んだものです。先生は子どもたちの学習過程をパターン化され、子どもたちが理科学習に興味を持って続けられるような手立てを多く考えておられます。また子どもたちに「あれ、どうして」「なぜだろう」「たぶん、こうだろう」などと疑問を持たせる問題解決学習の導入部分の工夫が多く見られます。環境づくりにおいても、栽培活動や校内樹木マップ、理科室水族館、理科だより、壁面展示など、無意識のうちに子どもたちが自然そのもの、そして理科に興味を持つきっかけになるような理科学習の推進に努力している極めて優れた論文です。

○優秀賞：愛知県碧南市立大浜小学校

長田洋一先生〈言語性学習障害児の基礎学力とワーキングメモリーを高めるために〉

この論文は、注意欠如多動性障害と学習障害を併せ持つ児童に対する実践記録です。学年が進むにつれて学力の遅れが大きくなり、心理検査の結果、言語に遅れがあり、聴覚記憶に問題があることが判明した児童に対して、長田先生は「ことばの教室」で学習パソコンを用いて、基礎学力とワーキングメモリーを高めることを目標にして取り組まれました。児童は1学期は意欲的に学習に取り組みましたが、2学期で間違いが多くなったので、教師が精神面での支援を強化した結果、特に算数の学力に向上が見られました。注意欠陥多動性障害と訳されていますADHDと、ふつうLDと呼ばれる学習障害との二つの障害を負った児童の実態に応じて、パソコンの活用を通して、算数の学力を向上することができた優れた実践論文です。なお長田先生は、第29回において優秀賞を受賞されています。

○優秀賞：福岡教育大学附属福岡小学校

佐藤美和子先生〈いのちを大切に育てる子供を育てる保健教育〉

佐藤先生は、子どもたちのいのちに関する実態調査を行い、ほとんどの子どもが「いのちは大切だ」と感じているが、その理由については漠然としている、という事実を知られました。そこで、本当にいのちの大切さを実感でき、日々の生活の中で自他の体や心を大切にできる子どもを育てることを目指し、様々な体験活動を段階的に実施されました。先生の実践の最重要ポイントは、子どもたちに促す体験活動と子どもたち自身の感受力、感性というものをつないでおられることです。例えばクイズ形式で「これは何の音？」と聞かされた音が、胎児の心音であること知った子どもたちの驚きは大変大きなものであったことが分かります。その結果、実施前と比べると家族といのちについて話したり、いのちがなぜ大切かを実感できたりする子ども

が増えたという実践記録です。自分の目の前にいる子どもたちの実態をしっかりと把握し、子どもたちが自らの考えや行動で健康問題に取り組む姿が研究の成果から伺える優れた論文です。

○優秀賞：香川県三豊市立仁尾小学校

山下昌茂先生〈食育を通じた低体温解消へのチャレンジ〉

山下先生は、病欠者の多い小学校に校長として着任され、自校の児童の健康状況が低体温にあるとの仮説を立て、全校生徒の体温を測定してみると、36.5°未満のその割合が76%でした。先生はこの低体温解消のため、運動・睡眠時間の確保と食育に取り組みました。学校経営の立場から食育の推進に取り組んだ実践ですが、その取り組みは栄養指導にとどまらず多岐にわたり、豊かなアイデアに満ちています。またこの実践は実に徹底しており、その成果は添付のデータによって十分に確認することができます。実践内容の全てを取り入れることが難しいにせよ、他校で参考にできる内容を多様を持った優れた論文です。

○特別記念賞：埼玉県越谷市教育センター

大西久雄先生〈ICTを使って情報モラル教育振興の気運と実践共有の波を創る〉

子どもたちのスマホやネット使用によるトラブルが社会問題化しているが、保護者や教師の危機意識や問題解決の具体的実践には未だにばらつきと戸惑いがある。情報モラルやリテラシーを指導することへの垣根の高さと自信の低さも要因の一つである。そこで大西先生は、誰もが気軽に利用でき、自由に使える情報モラル教育の資料提供と実践活用及びその成果共有の機会をICTの有効活用によって創り上げられました。FacebookやCMSを活用して、漫画で考える情報モラル教材を拡散するという活動を展開している優れた実践論文です。なお大西先生は、第29回において特別賞を受賞されています。

※CMSとは高機能なWebサイトを手軽に構築するためのソフトウェア。

○特別記念賞：岩手県山田町立大沢小学校

佐久間充先生〈「学校の宝」を活用した復興教育の推進〉

佐久間先生の勤務校がある岩手県山田町は東日本大震災で801名の犠牲者が出ました。被災家は総家屋の46%の3,369棟です。佐久間先生が勤められる大沢小学校では、長きにわたって小学校独自の全校表現劇「海よ光れ」が展開されてきたのですが、これに復興教育の柱として新たに「地域の再認識」「地域の一員としての自覚」「地域への愛情」の意識づけを加えて復興教育を実践してこられました。この実践は、子どもたちばかりでなく、教職員、地域住民一体となつての活動に発展しており、総合学習の一つの方向を示しています。「『海の子』『元気倍増』プラン」「復興教育推進の基本理念」、そして「復興教育の柱としての全校表現劇『海よ光れ』の取り組み」と、資料を用いながら順を追って活動の紹介へと結びつける記述は、実践報告として極めて分かりやすいものがあり、他校における実践の参考となる優れた論文です。

《中学校》

○最優秀賞：宮城県気仙沼市立唐桑中学校

阿部一彦先生〈1000年後の命を育む生徒の育成〉

阿部先生の前任校である宮城県女川町立第一中学校がある女川町は東日本大震災で827名の犠牲者が出、総家屋の89%が被災家屋となりました。阿部先生はこの第一中学校に大震災の一月後に入学した子どもたちへの取り組みを記録されました。甚大な被害を受けたふるさとに社会科として「何ができるのか」という課題意識から出発した実践は、俳句づくり、救援活動、募金活動、そして国際会議での発表と交流など、まことに多様かつ生き生きとしています。学びはその場面で終わるのではなく、地域や世界とつながり、人生に有効に働くものであることを実感させる論文です。東日本大震災の被災経験を克服し未来に向けて力強く生きようとする生徒たち、筆者をはじめとする教職員、地域住民、

それよりも生徒たちに深い敬意を表します。全国の学校教育活動に勇気と希望を与える極めて優れた論文です。

○優秀賞：大分県佐伯市立佐伯南中学校

石田周一先生〈楽しく学び、確かな力を育む国語科授業の創造〉

この論文は、石田先生が、毎年入れ替わる目の前の学習者一人一人に寄り添い、様々な実践を重ねられた結果、「学びやすい」「学びたくなる」「学び続ける」という三つの柱を基盤とした国語科授業を構築され、さらにその有効性について検証を進められた実践の報告です。この三つの柱を構成している「学習環境のデザイン」「主体的な学習」「学習の連続性と継続性」の設定は適切であり説得力を持っています。「学習記録用紙」の創意ある活用、学習者一人一人を生かすための授業実践の工夫等、他校でも参考にできる優れた実践論文です。なお石田先生は、第29回において奨励賞を受賞されています。

○優秀賞：岐阜県教育委員会美濃教育事務所  
薄田茂樹先生〈21世紀型能力につながる汎用的な資質・能力を育成する音楽科学習〉

この論文は、21世紀型能力、すなわち「思考力」「基礎力」「実践力」をベースとした音楽科教育を目指した実践です。教科の評価にパフォーマンス評価を取り入れ、21世紀型能力を目指す資質・能力の育成を図るために新たな音楽科授業モデルを提案しています。例えば、パフォーマンス課題の一つとして記されている「リズムを自由に変えてジャズで即興演奏をたのしもう！」という活動などは大変興味をそそられるものでした。アジア諸国においては、音楽科が単独で存在するのは日本を含め、マレーシアなどわずかとなり、教科の統合が急速に進んでいます。こうした現状の中、現在の学校の音楽教育に対する課題を明確にし、その課題解決のための手法に取り組み素晴らしい結果を生み出している優れた論文です。

○特別記念賞：滋賀県守山市教育委員会教育研究所 中西一雄先生〈科学的探究活動プログラムとその実践成果の検証〉

PISA調査における科学リテラシーの構成要素である「科学的能力」及び「科学に対する態度」における我が国の子どもの課題解決に向け、「科学的探究活動プログラム」を開発した論文です。そして中学校第三学年を対象に実践し、その効果について検証し、理科学習に対する動機づけ、及び理科に対する将来志向性を高める上で、高い効果があることが分かったという実践論文です。研究へのせまり方が大変分かりやすく生徒の意欲的な取り組み状況もよく分かる優れた実践論文です。なお中西先生は、第28回において奨励賞を受賞されています。

○特別記念賞：三重県松坂市立三雲中学校 楠本誠先生〈ICT機器を活用した協働学習モデル実践32事例のまとめ〉

楠本先生の学校では生徒一人一人にタブレットを貸与し、授業で活用し、五つの学習プロセス（課題共有、個人思考、グループ思考、全体共有、振り返り）からなる協働学習モデルを作成し取り組んでいます。楠本先生は3年間、中学校理科におけるICT機器を活用した協働学習モデルを取り入れた実践を行い、授業後、生徒からアンケートを取り、成果と課題を記録しました。次の授業で課題を修正し、改善を図り、次の授業デザインにつなげていきました。3年間の32の実践を振り返って、ICTを活用した協働学習の成立の条件となる要件を整理した優れた実践論文です。

審査委員会の座長として申し上げたかったことは以上のとおりです。しかし最後に、応募・審査の全体の状況について、二つのことを申し上げます。

一つは、2011年3月11日の東日本大震災に関することです。昨年の宮城県石巻市立雄勝小学校の徳水博志先生に続き、宮城県気仙沼市立唐桑中学校の阿部一彦先生が復興教育で最優秀賞

を受賞されました。今回も東北三県から、未曾有の困難から立ち上がり、防災教育を含めた様々な生き生きとした新しい実践論文が応募されました。

私が理事長をしております公益財団法人中央教育研究所は、大震災復興の支援活動を実施しております。原発事故から大熊町の人たちが集団で会津若松市に避難していますが、いわき市など他の土地に移る人が多く、3分の1に減ってしまったそうです。

東京大学名誉教授の水野丈夫先生が「命の授業」を行っている大熊町の大野小学校と熊町小学校は対象の5年生が10名前後に減少しています。大熊町の小学校の授業で水野先生の「後戻りのできない人生ですので今日を大事にして生きてください」という言葉に対して、ある子どもの感想文に「私はみずの先生の〈過去には戻れない〉という言葉に心を打たれ、この言葉もみずの先生もいつまでも忘れないでいたいです」とありました。大熊町という故郷に何十年も、ひょっとすると一生戻れない子どもの感想だけに先生の託されたのとは違う、深刻な文脈で、先生の言葉を受け止めたのだと思います。

中央教育研究所は平成26年度から支援活動を福島県だけでなく、宮城県、岩手県に拡大し研究所の役員による授業や講演活動を行っています。

現実としては東北3県の復興には厳しいものがありますが、三県の先生方の復興に対する熱い思い、人材の育成こそ復興の要（かなめ）とする教育実践の結晶ではないかと考えます。いつか先生方の熱意が実現されることを心から願っています。

先ほど申しました阿部先生の受賞に伴い、女川第一中学校で阿部先生と共に社会科の授業で津波の被害を最小限にする対策案を生み出し、石巻工業高校に進学した今も、自然災害から命を守る「命の教科書」を作り続けている山下脩君が今日の贈呈式に参加されております。

二つ目は、実践を文章にするという教育文化

の素晴らしさです。教育実践をする、授業をするというのは、世界的にどの国の教師もやっていることですが、実践したプロセスを「書く」という行動は日本独自のものではないかと思われます。その伝統は実に古い時期から流れてきました。私は教育の歴史を専攻していますが、明治30年代はじめ、つまり20世紀に入ったころから、今ある教育雑誌の先祖にあたるような教育雑誌が続々と出てきます。その編集者のほとんどは教職経験を持つジャーナリストたちでした。また読者は全部、義務教育学校の教員でした。その教育雑誌の中身を支えたのは何かというと、先生たちの投稿でした。そしてその投稿の中身は、授業記録だったのです。つまり20世

紀に入るぐらいから、日本では実践をし、その結果を記録するという教育文化が、現職の先生たちによって担われていたこととなります。その流れは、大正時代には児童の文学的作文の指導記録、昭和期には観察記録や生活綴方の指導雑誌、戦後には民間教育運動や教育研究・授業研究雑誌の執筆活動として流れてきました。そしてこの教育賞に応募された先生方は、まさにその伝統の先端に立っていらっしゃるわけです。この流れを絶やしてはならないし、日本教育史の中の貴重極まる遺産として今後さらに発展させていかなければならないと思います。どうか先生方の手で、後輩の方たちに力強く伝えていってくださるようお願いいたします。



ICTに関わる論文の総評

赤堀侃司先生

受賞された皆さん、おめでとうございます。私からはICT部門の審査概要を簡単に申し上げたいと思います。私が一番感じましたことは、先ほど寺崎先生がおっしゃっていましたが、ICT部門といっても何も特別なものではなく、授業研究の一環だということです。ICTに関わるという修飾語がついておりますが、ICTは一つの「道具」であります。大切なことは、先生方の実践がいかに子どもたちの心に触れているのか、あるいは授業としてどう成立しているのかということが基本になくはならないと

思います。このことを今回も強く感じさせていただきました。

先ほどの寺崎先生のお話で、私も非常に感銘を受けましたのは、日本の教育の素晴らしさというものを改めて感じたということです。

と申しますのは先般、私はフィンランドに教育視察に行っていました。フィンランドといえば今、非常に注目されておりますが、その国も今ICTをセットにした授業デザインをしていこうという動きがございまして、私どもはそうした動向の調査に行ってきたところでした。

そういった点で見ますと、中学校の特別記念賞を受賞されました**三重県松坂市立三雲中学校楠本誠先生**の論文は、協働学習の教育実践をまとめたものです。ICTを使って、協働学習を32事例の研究で実践されたわけですが、その中で、例えばタブレットを使う、しかしタブレットを使うことだけで授業が成立するわけではなくて、それをどう使うのか、いったい何の目的で使用するのか、そこからスタートしなければいけないという当然のことではありますが、そこをきちんと授業デザインされたことに審査員が評価をしたということです。ICTが単なる便利な道具ということだけでは普及しないはずであり、例えば思考力にどこまで関わるのか、あるいは実践力にどう関わるのかということに32事例でモデルにして実践されていることに非常に大きな評価をさせていただきました。

それから2点目は、ICTは情報モラルがいつも議論になります。ICTを使うから、あるいはLINEがあるから、あるいはFacebookがあるから、子どもたちのネットいじめにつながるのだという論調も確かにあります。しかし、道具というのはどんな道具でもプラス面もありマイナス面もあり、光もあれば影もあるものです。どう使うかというところを、やはり実践的に研究していかなければならないことを我々は分かっているのですが、しかし、その実践が非常に難しいという問題があります。

そうした中で、小学校の特別記念賞を受賞されました**埼玉県越谷市教育センター 大西久雄先生**の論文は、情報モラルの漫画教材を20編作られて、小学校から高等学校まで、今非常に注目された活動をされています。ただ優れた実践を行ったからといっても、先生方の実践がそのままでは広がりはありません。何とかしてその実践をみんなに伝えていく、広めていくという役割が非常に大切ではないかと思っております。特に情報モラルに関しては、皆さんが苦労しています。ですから、優れた実践であれば、それに続いてみんなが真似をしていけるよ

うな仕組みを作っていくことが重要ではないかと思っております。一人だけで自己満足しては、日本全体には広がりません。

私はスーパーサイエンスハイスクール(SSH)の審査をやっているのですが、やはり同じです。先端に行く研究がみんなにとって役に立つためのストーリーや仕組み、方法を研究し、広げていけば日本全体がもっとよくなっていくと私は思っています。

そのほか感じましたことは、小学校優秀賞受賞の長田先生の言語障害児の基礎学力向上でパソコン等を使って指導した実践です。そこで一番私が感銘を受けましたのは、教師の声掛けでした。パソコンだけでは無理だとなったときに教師の声掛け一つで、子どもたちが目を輝かせて続けられるようになったという、つまり「道具」と「人間」がうまく合わさった時にはじめて道具は本当に生きてくるのだという主張に、私は「なるほどなあ」という気持ちを強くしました。

これからの世の中は、ICTという道具だけではなく、テクノロジーが私たちの生活、学校、学習に非常に大きな影響を与えてくるはずです。私たちがそれらとどう付き合っていくか、単に使うというよりどう付き合うかだと思います。どう機械と人間が関わっていくのがいいのか、それが研究の一環だろうと思うのです。そういう点で今回いろいろな優れた実践がありました。これらをぜひこれから中央教育研究所を中心にして広げていっていただきたいというのが、私が感じたことでもあり願いです。

これらの大変優れた実践に感銘をいただきましたので、お礼の意味も込めて講評をさせていただきました。ありがとうございました。